

2026年3月22日 説教「放蕩息子の兄と父親」

ルカの福音書 15章 25～32節

15章における「迷子の羊」のたとえ話、「失われた銀貨」に続く、放蕩息子のたとえ話の前半、24節までを前回学びました。今朝はそれに続く部分であります。前の三つのテーマとは異なった話のように見えます。今朝はこの箇所から御言葉をいただいでいきましょう。

1. 兄息子の驚き (25～27節)

① 兄息子 (25) 「ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。」

あくまでもたとえ話の中のことですが、兄息子は家の生業として、畑仕事に勤んでいました。その日も必要な農作業をし、疲れて家に帰り着くところでした。ところが、家の様子がいつもと違うのです。何か賑やかなのです。音楽や踊りの音が聞こえてきたのです。角笛、十弦の琴、豎琴、タンバリン、シンバルなど(詩篇 150 篇参照)に合わせた歌声と、それに合わせての踊りの掛け声なども混じっていたのでしょ。

② 兄息子の戸惑い (26) 「それで、しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、」

家に着くと、彼はしもべのひとりを呼び、いったい何んでこんな賑やかなのかと尋ねたのです。この家は大勢の人を収容できました。相当に大きな敷地と家であったのでしょ。

③ 弟息子の帰還と祝宴 (27) 「しもべは言った。「弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。」

すると、しもべは答えました。「弟さんがお帰りになったのです」。その瞬間、兄の顔がにわかに曇ったことでしょう。なにしろ、やりたい放題していたということは風の便りで伝わっていました。さらに「無事な姿で帰って来られたということで、お父様が肥えた子牛をほふらせなされたのです」という報告が続きました。彼は眉間にしわを寄せ、眉をハの字にしたことでしょう。どうして、肥えた子牛をほふってまでして、弟の帰りを喜ばなければならないのかと思ったのです。

2. 兄息子の怒りと不満 (28～30節)

① 兄の怒り (28) 「すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。」

兄息子は怒りをあらわにして、「家に入ろうともしなかった。」とありますが、宴会が行われている所には近づこうとしなかったという事でしょう。そんな祝いに、自分は加わるわけにはいかないと考えました。父親は、兄息子が仕事から帰って来たのに、宴に加わろうとせず、怒っていることを知って、彼の所にまで行き、いろいろとなだめました。父親は兄息子の気持ちをわからなくもなかったでしょうが、ともかくも宴に加わるように勧めたことでしょう。

②父への不満(29)「しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむと言って、子山羊一匹下さったことがあります。』」

なだめる父に対し、兄息子は反発して言いました。「私は働いて帰って来たばかりですし、これまでもずっと、お父さんのために働いてきました。一生懸命に働き、家のために貢献してきました。また、お父さんから言われた戒めを破ったことは、一度もありません。ならば、それ相応のご褒美をもらっても良いのではないのでしょうか。それなのに、これまでお父さんは、私のためには子山羊一匹をほふって、宴を開いてくださることもありませんでした」と父親への不満を爆発させたのです。

③放蕩の弟との比較(30)「それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」

そして言いました。「それなのにです。弟といえば、財産を分けてもらうとさっさと家を出ていき、町に行き、やりたい放題。お金は飲み食いや様々の遊びに使い、遊女にもおぼれて、使い尽くして、いたし方なく戻ってきたのです。そんなどうしようもない弟のためには、高価な肥えた子牛をほふって宴を設けるとはどういうことでしょう。」あまりに不公平ではないですか、というところでありましょう。どうして、私に対してもっとご配慮くださらなかったのですかと、文句をぶつけているのです。

3. 兄弟息子を愛する父(31~32節)

①父の説得(31)「父は彼に言った。「子よ。おまえはいつも私と一しょにいる。私のものは、全部おまえのものだ」

父親は兄息子に言いました。「わが子よ。お前は、自分でも言うように、はじめに働き、私のために尽くしてきてくれた。そして、おまえはこの家の跡継ぎだ。だから、私の財産や権利は全部、お前が引き継ぐことになるのではないか」。創世記に出てくるヤコブが兄エサウの長子の権利をとってしまったことがありました。エサウはなんとかならないかと父イサクに頼みこみましたが、それを元に戻すことはできずに怒ったことがありました。ですから、この兄息子が持っている権利は大きなものだったのです。

②喜ぶのは当然ではないか(32)「だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」

父親は、それと比較して弟の方は、家を出て行き、遊び惚けて戻ってきたのです。まさに放蕩息子でした。それゆえに父は言ったのです。「お前の弟は、死んでいたのも同然だったのだ。それが、戻って来たのだ。喜ぶことは当然のことではないか」と述べました。父親からすれば、兄も大切、そして弟も大切だったのです。今、行方不明の弟が見つかったのは、理屈を越えて喜ばしいことだったのです。

《展開と結論》三番目の放蕩息子のたとえ話の後半を学んできました。

今朝の聖書箇所からは、父親と兄息子との関係が注目されます。兄息子は大変真面目でした。また、父親の下で一生懸命仕え、働きました。弟が家を離れて放蕩している間も、しっかりと家を守っていました。弟が帰ってくるまでの兄は、何事もなく過ごしていたのです。ところが、弟が帰ってきて、歓待され宴が設けられているのを知ると、心が騒ぎました。そして、父親に抗議したのです。どうして、自分に対しては何もしてくれなかったのに、放蕩してきた弟を歓迎するのか。それは、あまりにもバランスを欠いていると怒っているのです。父の愛を受けている弟への嫉妬もありました。

兄の疑問は15章最初に出て来た、パリサイ人と律法学者の見方と同じです。彼らは、イエスが律法をきっちり守っている者たちを評価せず、罪人や取税人たちと不当に交わりをしていると批判していたのです。それは兄息子が「戒めを守り、真面目に働いてきたのにそれが評価されていない。」という文句と重なってきます。それはパリサイ人の考え方と同じでした。このたとえ話の中における兄息子は、少数派で弱い立場のように見えます。しかし、あの99匹の羊たちと同じように、実を言えば多数派です。律法を守ることによって義と認められるという律法主義(ガラテヤ人への手紙参照)は社会にあって優勢だったのです。

逆に弟息子は自力では生きることがままならず、父の憐みを頼りにして、立ち戻ったのです。それは、凶らずも神の恵み優先の信仰とつながっていました。人間はすべて罪人です。自力では救いは得られません。弟息子はすがる思いでやって来て、父からの赦しを得たのです。

とはいえ、このたとえ話を読んで、兄への同情を持つ者は少なくありません。なぜなら、多くの人々はそれなりに真面目であり、兄息子のように生きているからです。不公平は嫌いです。何か行うことで救いを得たいのです。でも、兄息子も罪人です。それを自覚し告白しなければ神の恵みには浴せません。それでは、この兄には救いの道はないのでしょうか。いいえ。この話には、よく読むとこの兄への救いの手も、ちゃんと伸ばされていたのです。「子よ。おまえはいつも私と一しょにいる。私のものは、全部おまえのものだ」という父の言葉に注目したいのです。弟息子はどん底まで落ちて、我に返りました。そして、自分が父の下で、どんなに恵まれていたのかに気づきました。「天の神に感謝せよ。その恵みはとこしえまで」(詩篇 136:26)、「すべての事について感謝しなさい」(1テサロニケ 5:18)とありますが、兄息子も自分がどれほどの恵みの中に置かれているかということに気づかなければならないのです。もし、その恵みを恵みとして味わっていれば、弟の帰還を皆とともに喜び、祝うことができたことでしょう。

「いさおなき我を 血をもてあがない イエス招き給う み許にわれゆく」(讚美歌 271)。罪人である者を、十字架上で血潮を流し、贖ってくださった主イエスが、この兄息子とともに、私達をも招いてくださっています。私達もキリストの十字架をもう一度、見上げていきましょう。